

# 欲生心の象徴的自覚

3

本多弘之

*honma hiroyuki*

浄土の教えにおける宗教的要求は「願生浄土」と表現され、この願生の意欲が浄土に往生を得ることによって満足する。それによって、一切の衆生が平等に救済されると示されている、ようである。「ようである」と付加したのは、この前提をそのまま浄土教の大前提とすることに、いったん留保を設けたいからである。

浄土の教えが、他界願望のかたちで説かれ

ていることの大きな意味は、一般的な生活者に宗教的な自覚的救済を語りかけるための方法（無上方便）だとされている。忙しく生活に追われる衆生に、その生活が流転輪回りゅうてんりんかいの生存であると呼びかけ、その苦悩の生活からの解放を説示するかたちとして、仏陀の世界である浄土が、流転輪回の世界とは異なる場として語りかけられているのである。しかし、現代の文明社会の常識としては、この他界観

念による救済の呼びかけは、かえって大変なじみにくいものになっているのではなからうか。現代の宇宙論や天文学の知識の流布により、文字どおりの他界は、単なる人間の空想に過ぎないとわかってしまっているからである。

仏陀が獲得された大解脱といわれるような根源的な人間回復は、いかに言葉を尽くしても、完璧に説き尽くすことはできないのかも



しれない。仏の自内証としての自在の境地を、一般のレベルの体験に近づけて表現すれば、かえって不透明な神秘体験としてしか了解されないことになる。『転迷開悟』と説示される意識の翻転を、自力の発想で自身の意識上に具現する方法は、菩提心に立ち上がった多くの求道者を長く誘引してきた。しかし、その道が時代と機根に合致しないと見極めたのが、道綽禪師の「聖道・浄土」二門の「決判」であった。この二門の決定的差異を自覚して、これからは浄土門を選び取ろうと、『安樂集』で宣言したのである。親鸞はさらに、「聖道の諸教は、行証久しく廢れ、浄土の真宗は証道いま盛なり」（『教行信証』後序）とまで宣告している。こういう決定的表現の背景には、人間存在の愚かさを自覚し、有限なことの自覚ができない自力の発想の根深さを破って、苦悩の命の尊厳を取り戻そうとする、長い求道心の歴史の歩みがあったのである。

聖道門が基本的に人間の意識を自分自身で努力して変革していこうとする立場であるのに対して、浄土の教えは、大悲の願心の側から、人間を愚かな凡夫とみて、手を差し伸べようとするのだと言われている。この基本的な発想基点の相違を、求道者は必然的な選りばとして決断して選り取りなければならぬ。本願力に触れることは、自身の有限性と愚鈍

性を判然と引き受けることなしにはありえないのである。

選択本願がわれら凡愚を救済しようとして、「一如宝海」から法蔵菩薩となつて立ち上がったのだ、と親鸞は受けとめた。その背景に「発菩提心」について「自力聖道の菩提心こころもことばもおよばれず 常没流転の凡愚は いかでか発起せしむべき」（『正像末和讃』）という見極めがあるのである。さらには「三恒河沙の諸仏の 出世のみもとにありしとき 大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり」（同）と、現在の生存の背景に恒河沙の時間の歩みがあり、そこを求道心とともに生きてきたのであるけれども、それが流転の時間であったのだと感じられてもいる。

振り返って、現代生活を営むわれらは、日常的な世俗社会に埋没して、宗教心の深いはたらきから疎外されているのではないか。換言すれば、相対的な有限の情況に振り回されるのみで、伝統として伝えられた宗教的な習慣や習俗が、消え失せているということなのである。村落や町村の社会的紐帯が弱まり、家の形態がすっかり崩壊したことによって、いつの間にか親から子に受け継がれた宗教的伝承が消えてしまったのである。

会社人間として経済活動中心の生活に没頭するサラリーマン社会なのだから、やむを得ないのではあるが、生活のなかで自己の存在

の意味が問われるような事態になったとき、頼むべき宗教的な言葉も習慣も身に付いてはいないのである。しかし、人間は相対的で有限な生命の限定を与えられているばかりでなく、個体として他に取り換えることが決してできない独立個の存在でもある。一回限りの存在なのである。自己の存在は、この時間空間に、そして特定の家庭や時代状況や社会体制に、今ここにこの身をもつて限定されて生きている、これが厳粛な事実なのである。

だからして、個としての人間存在は、弱いものであり条件的存在である。正しい人間理解や自己理解にとつて、有限を超えた大きなはたらきが存在の根底にあることを考察することは、必要不可欠なことであろう。思いもかけない事件や災害に出遭うことが起こるとき、人間が決める善悪や価値の有無などから、こぼれ落ちた自分に出会うことになる。そういうときに、この宗教的智見を知らないこと、立ち上がるすべを失うことにもなるのではないか。この存在を支える無限なるはたらきを、あたかも有限の外側に存在するかのごとくに表現して、救済意志の場を建立するという物語となっているのが、浄土の教えなのであると思う。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）